

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)32999153667
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No 1154163

購読料 月額 600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

「小さな」政府と「大きな」政府

滝野 忠……………2

国家、そして議会制民主主義とは

狂騒「サッカー・ブーム」のツケ……………3

◇京コン闘争勝利のご報告とお礼◇ 京都コンピューター学院労組……………4
四人の解雇撤回を勝ち取りました

労働組合の「基軸」は競争の排除なのに……………5
―電機連合は資本の味方?―

総括なし、責任なし……………7
―全通水戸大会のゆくえ―

団への信頼と忠誠は不思議な魅力……………8
―一〇年ぶりの国労闘争団訪問―

われわれの夢は実現する……………11
―カストロ議長のパレード演説から―

読者からのおたより……………13

旬刊 社会通信

NO. 841

二〇〇二年七月二一日号

二〇〇二年七月二一日発行
(毎月一日・二二日・二二日三回発行)

「小さな」政府と「大きな」政府

国家、そして議会制民主主義とは

国の借金が七〇〇兆円を超えた。国のお金の単位は最低が億円。億とか兆というお金は労働者大衆にとっては、想像を絶する額である。平均的労働者の年収は四百五十万円前後、生涯賃金（四〇年勤続）でやっとこさ一億八千万円になるかどうか。賃金からは所得税、地方税、社会保険（医療・年金）などが差し引かれるから、手取りで約一億四千万円前後にすぎぬ。この実質生涯賃金から住宅費三千万円、教育費二千万円が消えていく。だから労働者大衆は労働者となつてから定年で退職させられるまでの四十年間を約九千万円で過ごす。実質消費額は、年間二百三十万円、月二十万円弱である。「豊か」、「世界一高い」と資本が一方的に宣伝する日本の労働者の賃金はこんなにも安い！

こんなに低賃金な労働者に大増税（かれん誅求）の嵐が襲い来らんとしている。「国家財政は火の車で、国の借金は増え続ける一方だ。だから、『財政改革』で出費を減らさなければ」というのである。国家の財政と労働者大衆の生計は反比例する。政府が国家の財政を節約することは、その分だけ労働者大衆の出費がふえる。国の政策と労働者の生活は、このように「敵対」的關係にある。

それはなぜか。現代社会における国家は、資本を社会的力とする勢力によって運営され、支配されている。国家は生産手段を独占する資本家階級と資本が必要とする時のみ生存を許される労働者階級との非和解的対立の産物として、社会の中から生まれた。そして、その政治的外被が議会制民主主義である。

階級対立の激化、労働者階級の抵抗は、資本にとってムダな出費を国家に押しつけた。いわゆる「大きな」政府である。これに対し、資本家連中が声高に叫ぶのが、「小さな」政府だ。○二年度予算に具体的にみよう。

歳入は総額八十一兆二千億円、税収四六兆八千億円、税外収入四兆四千億円、国債という借金三十兆円。国の収入の約三七％が借金でまかなわれる。歳出は社会保障費十八兆二千億円、地方交付金十六兆一千億円、借金返済費である国債費十六兆六千億円、この三者で出費は五十兆八千億円となり、残りは二十九兆四千億円となる。議論まっさかりの公共事業費。予算額は八兆四千億円だ。これを加えれば政府が行政に使える費用は二十一兆円となる。

「小さな」政府論は予算規模は八十兆円をこえるのに、国家維持のための費用は二十一兆円に過ぎぬ、社会保障や地方に取られる金が多すぎるといっているのである。「小さな」政府論を主張するのは資本家連中と高級官僚たち。「小さな」政府論の根本は、国家は軍隊と官僚機構を維持するのに、最大の金を使えるようにすべし、というものだ。つまり、社会保障費や地方交付金はムダな金というのである。

階級社会にあつては官僚は社会の上に立つ特権的地位を与えられる。彼らがつ公的な弾圧機能、そして徴税権、膨大な予算執行権がそうする。だから、政財官の汚職の多くは必ず「官」がその中心にある。ムネオ汚職では政のムネオ（自民党）、民の建設業者・三井物産、官の外務省との構図となつた。ODA予算は一兆円弱。この数倍、いやそれ以上の金を動かすが、国交省、農林省、厚労省。ムネオ汚職は「小さな」事件の一つである。

(滝野 忠)

狂騒「サッカー・ブーム」のツケ

群れて流れて

群れて流れて、何もかも失ってしまうのが日本の政治、文化、社会、思想の特徴のようである。このことは明治の時代から言われつづけ、第二次世界大戦後、一九三〇年代の日本のファシズムと戦争の時代への風潮を総括し、丸山真男が「日本的ファシズムの論理と心理」で説いたところでもある。

この旧弊、日本人の悪弊はいまだ「健在」といわれなくてはなるまい。一九九〇年代前後の世界史の大転換の始まりとともに、「群れて流れて」の傾向は強まるばかりである。二十年前の第二臨調と「めざしの土光さん」神話、そして国鉄分割民営化、さらにバブル末期には「株をやらない奴は時代遅れのバカな奴」の大宣伝。十年前には政治改革、小選挙区制導入だというバカ騒ぎ、つい数年前のビッグバン、金融自由化論と四〇一K（確定拠出型年金）騒動。ここ二―三年は株主重視型の経営が世界の流れと国際会計基準を導入するは、成果・成績主義にもとづく能力主義管理だ、と。きわめつけは「聖域なき構造改革」論の大合唱である。

「群れて流れた」二十年はなにをもたらしただのか。「自助・自立」のかけ声とは裏腹に、公平、公正、平等は資本の論理だけがまかりとおった。資本が社会的力として権力をにぎっている社会では、公平、公正、平等は資本にとっての公平、公正、平等となる。国鉄分割民営化に典型的に示されたように、資本の搾取に反対する労働者は国賊とされ、資本の儲けにつながる線路は切り捨てられ、弱者は棄民化にされつづけた。

政治「改革」という改悪は、現代国家は階級国家、社会主義の実現こそ労働者にとって真の公平、公正、平等社会への一歩とする政治勢力が解体され、選挙は労働者をどうやって支配するかの手法を選択するだけの道具にされてしまった。それが保守二党論である。それへの消極的、非能動的、無自覚的世論傾向、さらには口約束はもうたくさんとする意識が、「支持政党なし」層の激増（五〇―六〇％）という政治不信のあらわれである。

政治はガタガタ、政党はボロボロ、経済の動脈である銀行はヨレヨレ。「群れて流れた」ツケが、財政危機として労働者大衆に転嫁されようとしている。こんな時、また群れて流れる動きが二つの分野であらわれている。一つはワークシェアリングへのコールであり、もう一つはガキからジイさんバアさんまでを巻き込んだサッカー狂騒曲である。アメリカは、対テロ戦争を第四次世界、さらにはフィリピン、インドネシア、イラク等で展開されている軍事行動は眼前にある大戦と位置づける。そして「いつ終わるかわからない」戦争ともいう。かつて、一六世紀の新大陸発見ではスペイン、ポルトガルが、そして資本主義が世界を包摂した一九世紀以降、イギリスやフランスは植民地戦争で何十万、何百万もの現住民を虐殺した。まさに、牛馬を屠殺（とさつ）するかのようになんぞ殺したのである。現在、われわれの眼前にある「反テロ戦争」という名のアフガニスタン、中東戦争は、かつてイギリスの貴族たちが楽しんだという狐（きつね）狩りにも等しい行為である。

テロへのアメリカのおびえは、サッカーにも見られる。アメリカチームの行く所、戒厳令が敷かれているからでもある。重武装した兵士たち、そして狙撃手に、空からのテロ阻止を名目とした武装ヘリコプターの群れ。

スタジアム建設に四千億円

サッカー世界戦は日本の十会場で予選四八試合、決勝トーナメント八試合の計五六試合がおこなわれた。財政危機が喧伝されるなか、国と地方自治体はぼう大な資金を注ぎ込んだ。スタジアムの建設費だけでも横浜国際総合競技場六百三億円、札幌ドーム四百二十二億円、埼玉スタジアム七百八十億円、静岡三百億円、新潟三百十二億円、宮城二百六十九億円、神戸二百三十億円、大阪四百十六億円、大分二百五十一億円が費やされた。カメルーン・チームの合宿地となった大分県の総合陸上公園に総工費はなんと六百五十億円が投じられた。大分スタジアムでの競技はたった四試合である。既存のスタジアムを改修したのがカシマ（茨城）だが、それでも百九十三億円も要している。

収容人員はいずれも四万から六万人というとてもない数字。これら施設が今後、超満員となり利用される機会ほとんどない。維持費だけでも横浜は年十億円、収入見込みは四億円だから、残り六億円は市の持ち出し。横浜のような大都市でこんな状態が予想されるのだから、宮城スタジアム（もより駅から徒歩三〇分）、静岡スタジアム（ジュービロ磐田、エスパルスは清水に立派なホームグラウンド）、大分、新潟等ではなにかいわんやだ。年間収支見込みを黒字としているのは、来シーズンからプロ野球団の日本ハムがホームグラウンドとするわずか札幌だけ―札幌スタジアムは建設・維持は自治体、運営は民間会社に下請け。これでは赤字になるわけない―で残りは億単位の赤字となる。

群れて流れて、あとに残るのはツケだけ。五年前の長野冬季オリンピックの教訓がまったく生かされていないのだ。長野市はオリンピックの翌年、施設の運営維持費だけで八億五千三百万円の赤字を出し、その赤字は今もつづき、市債の残高は二〇〇四年に二百九億円にも達する。これと同じことがくり返されるにちがいない。

つづく不況、サッカー・ワールド選手権で景気回復を、地域起こしをとというのがこれら自治体の切なる願いだっただのである。日銀や景気回復の夢を追う金融資本の調査機関は、北海道七十三億円、茨城二百六十億円、新潟三百三十億円、横浜二百五十七億円、静岡百億円、大分六十億円との経済効果を試算した。しかし、計算は皮算用であった。

宴（うたげ）のあとには、増税がやってくる！

◇京コン闘争勝利のご報告とお礼◇

四人の解雇撤回を勝ち取りました

標記のとおり、大阪高裁内外で和解が成立、二〇〇二年七月一日、諸手続きが実施されたことを確認しました。ここに争議解決いたしましたので、ご報告申し上げます。

①学院側は、四人への懲戒解雇を撤回。四人は退職。

②学院側は組合員に対する債権を放棄。

③学院側は、裁判所の定めた額の和解金を支払う。

特に、谷口さん解雇事件については最高裁で「解雇有効」が確定するという不当なものでした。それ故に学院側はその解雇撤回とそれにかかわる債権放棄について、なかなか諾とせませんでした。しかし、積み上げてきた闘いと粘り強い交渉の中で最高裁の「解雇有効」確定を跳ね返し、解雇撤回、債権放棄をさせることができました。

十二年前、たった四人で始めた闘いでしたが、多くの皆様の、まさに物心両面にわたる暖かいご支援で勝ち抜くことができました。苦しいこともありましたが、今、闘ってきて本当によかったと思っています。

支えてくださった皆様にご心から感謝を申し上げ、争議解決のご報告とお礼と致します。長い間、暖かいご支援本当にありがとうございました。

京都コンピューター学院労働組合

執行委員長 吉田伸二

組合員一同

労働組合の「基軸」は競争の排除なのに

— 電機連合は資本の味方？ —

「強い会社」「強い日本」つくれ 電機連合は、ユニオン連合で自動車総連とともに、今もつとも影響力ある組合である。電機連合は自動車総連、鉄鋼労連とともにIMF・JC（日本金属労協）を組織し、連合を、したがって日本労働組合をリードする。電機連合の大会関係資料に目を通した。その考え方の偏向、強烈なイデオロギーの主張にあらためて驚かされた。これが、「労働者の生活向上、労働条件向上をめざす組織」の方針か、資本の主張そのものではないか、と。

大会向けにまとめられた「電機産業の新たな成長と発展のための戦略—電機産業の再生に向けて私たちができること」の文書は、巻頭に電機大手十七社の〇二年三月期業績を掲げ、「決算は、大変厳しいものとなった」と強調する。そして、つづけて「電機産業が新たな成長と発展の道を歩み始めるためには、我々自身の改革が求められている」という。

電機連合は労働者にどんな「改革」を求めているのか。

「昨年来各社の労使は大規模な構造改革に取り組んできたが、それらを具体的な成果に結びつけられるかどうか、『強い企業』を創ることができようかの正念場の二〇〇二年度である。その改革の担い手は我々自身だ。また、改革の影響を直接、間接に受けるのも我々自身である。改革に痛みが伴うことは言うまでもない。しかし、だからと言って改革を躊躇しては『強い日本』も『強い企業』も造れない。我々自身が『強い個人』になる必要がある。『強い個人』になるための制度の整備、各人のチャレンジへの支援、痛みに対するケアなど、改革の過程における労使の役割は従来以上に重要になってくる」。

「強い企業」をつくるのが労働組合、労働者の任務だというのだ。「強い企業」だと、話しが違うのではないか。電機連合は労働組合を名乗っているのではなかったか。「痛み」を労働者に強要し、「痛みが伴う」、「痛みに対するケア」を主張する内容は労働組合の文書ではない！ 資本の側の文書である。

「強い日本」をつくるだと。大会第二号議案『二一世紀を創る』二〇〇二・二〇〇三年度運動方針に関する件』の冒頭は「新しい社会を創る、新しい産業・企業・組織を創る、新しい働き方を創る、新しい生活を創る」と、今はやりの言葉が羅列されている。しかし、「新しい時代を創る気概」の中味たるや古色蒼然たるものだ。日経連が創立以来掲げ続けてきた詔（みことり）がオウムのようにくり返されている。

「社会のしくみが変わり、働きようも変化すれば、そのパートナーである労働組合も、その存在意義としての基軸（??? 筆者）は堅持しつつ、柔軟な時代認識を持つてこれに対応することは、むしろ当然のことだと考えます。今後もしも働き関係が『社会の安定帯』（日経連の詔そのもの！）として機能するためにも、時代の潮流を見通す労働組合の先見性が問われるところですよ」。

「良き労使関係が『社会の安定帯』、これがあって、「強い日本」が生まれるという。まさに電機連合は日経連そのものである」。

このような観点から、「総合労働条件改善闘争」（春闘）の評価とこれからのあり方が論じられる。それが大会議案別冊の「二〇〇二年総合労働条件改善闘争の評価と課題」だ。

〇二春闘総括最大の焦点は、①トヨタが史上最高のもうけをあげたのにベアゼロで押し切ったこと、②電機が「〇二年緊急労務対策」（賃下げ、定期昇給の延期、時間外割増率の引き下げなどの賃金抑制）の提案をおこない、電機連合がこれを受け入れたことだ。

電機連合の「基軸」は会社を強くすること、その障害になる時(？)は労働者の利益を譲り渡す、明け渡すというものだ。だから、緊急労務政策の受け入れは、「まさにやむを得ぬ対応であり、決断であったと、清々と表明しておきたい」とアツケラカンと表明して恥じるところはない。こうして、春闘は終焉させられ、日本の労働運動は資本のいうがままとなり、労働者は資本と労働組合の本来なら敵・味方の二つの組織から「強い会社」、「強い日本」をつくれ、と痛みを押しつけられつづけることになる。

連合は統一要求放棄の方向 そのもつとも端的な表現が、連合の二〇〇二年春闘の「中間まとめ」(六月十七日)、とりわけ「春季生活闘争改革の検討方針」の「これまでの相場形成と波及パターンの見直しについて」である。こうある。

「国際競争や構造変化に直面する輸出産業や公益産業の状況などから、一時的な業績回復があったとしても、これまでの上げ幅中心の相場形成・波及パターンは成立し難いとの認識に立って春季生活闘争の枠組みを検討する。

その場合、賃金については、個別賃金の取り組みを基本とし、生計費を基礎とした賃金のミニマム規制の取り組み強化をベースとする」

いわんとしていっているのは、連合は統一要求基準は掲げません、ということだ。

労働者は勤労者の八五% 労働組合の「基軸」、つまり「団結」の基礎は競争を排除することにある。労働者は四つの側面から競争にさらされる。国と国との競争、産業・企業間の競争、資本家との間の競争、そして最後には労働者同士の競争である。競争こそ資本の絶対的・法的法則なのであり、その競争から生まれ得る障害を規制し、労働条件を向上させるべく自然発生的に生まれたのが労働組合である。

労働者は現代社会では就業者の九〇%弱を占めるまでになった。五月の労働力調査からはごく簡潔に次の結論がでる。就業者は六千三百五十六万人、そのうち雇用者(労働者、労働力売り賃金を得ている者)は五千三百二十万人、それに失業者という「労働者」が三百七十五万人。したがって、労働者階級の比率は八四・六%となる。就業者中、自営業者・家族従事者は一千七万人(これには農林漁業、小店主等が含まれる)であり、いわゆる中間階級者は一四・九%。両者あわせると九九・五%が労働者階級といわゆる勤労諸社会層の中間階級となる。資本家と称される労働者を雇用している「就業者」、つまり「雇用主」はわずか二九万人となり、その比は〇・四三%強にすぎない。これが社会の現実の階級構成である。

労働者を雇用する資本家にもいろいろある。トヨタのように三十万人の労働者を働かせ、年間に十五兆円を売り上げる巨大独占資本から四〜五人の小零細企業というように。日本の社会を支配するのはひとにぎりの巨大独占資本でありその「経営者」たちである。その数は数千人という程度であろう。

労働者が団結すれば巨大独占資本家どもはたち所にもふつとんでしまう。だから、巨大独占資本家たちは「労使関係は社会の安定帯」と巨大労働組合幹部には、海外での生産と利子から生じた利潤、国内の利潤のほんの一部をいろんな形でばらまきつづける。政府のさまざまな審議会もその豊かな舞台で、彼らの味方に引き入れ、番犬とする。この手段なくして、資本の支配がなりたたないことを彼ら資本家たちは本能的に知っている。

組合大会の焦点 こんな状況下の労働組合大会の季節。すでに郵政公社の二つの労組、JRの一つの組合(JR総連)と単組(JR東労組)が大会を終え、電機連合、NTT労組では七月三日から始まった。

今年の労組大会の課題は①春闘のあり方、②雇用・失業問題、③リストラと称される資

本主義的合理化、④官公労では行政改革、⑤政治・政党支持であり、この他に①産別統合という組合のリストラ、②それにもなう役員・財政リストラ―役員・書記の減員、③組合費値下げ等、労働組合の「自己改革」といわれるものである。

六月十九日から三日間開かれる全通の大会では「リフレッシュスタート宣言」をスローガンに、運動・事業・ライフワークスタイルのリフレッシュがいわれている。電機では「強い個人」づくりである。

総括なし、責任なし

―全通水戸大会のゆくえ―

六月一九日から水戸茨城県民文化センターで開催される全通第五六回定期全国大会は、内外からその詮議の行方が注目されている。まず一番の関心事は、来年に予定されている郵政公社に対して、今国会での審議状況も含め、郵政関係の最大労組としてどういう方針で臨むのか。それに関連して、公社発足を前に吹き荒れる大リストラに対し組合員の雇用と労働条件をどう保障するのか。そして、新聞で報道された全郵政との統合に関してその協議の内容、今後の対処についてどうするかが焦点となっている。しかし、大会議案書には「リフレッシュ」の空虚な言葉が並べられるのみで、リストラ地獄の中、明日が見えない現場組合員の悲鳴は、まったく届いていない。

大会議案書から総括という項目が消えたのはいつの頃からか。運動の反省をしないまま、今後の方針だけが決定されるのだ。それもそのはず、全通が積極的に推進した過去の数々の施策―「総合担務制」「郵便番号7桁化―新郵便処理システム」などはことごとく失敗し、今年には発足しているはずの「ニューユニオン」も頓挫、さらには「失敗は許されない施策」として労資共同で試行を開始した「新集配システム」もスタート時点で破綻、あづくに組織は減少、では総括などできないというのが本音だろう。

民間経営者はもちろん、最近では官僚のトップでさえ、不祥事や経営失敗に対しては結果責任を取るようになったが、わが労働組合は方針が達成できなくても誰も責任を取らず、トップは安穩と組合費で生活するのだ。運動方針はあらかじめ郵政事業庁の承認を得て策定され、役員人事も各地方と中央のプロ専従たちの談合の内定結果を本庁に知らせて決定される。もはや労働組合は経営から独立した自主的な組織ではなく、経営組織の一部としてコントロールされるのだ。経営形態がどう変わろうと、営々と築き上げてきた郵政一家の絆は深まり、労資官僚の天下り先は護持される。労資の「出合い」「意見交換の場」で人事部労務対策費、組合費は湯水のように使われ、より「高次な労使関係」が醸成されるのだ。全通組合員には総括は示さなくても済むかもしれないが、全郵政との合併の際には「過去の不幸な時代」の総括を自己批判として示すことが最低の条件となる。

全郵政の組合の「理念」として掲げられる「生産性運動」を承認することが新公社労組発足の必須条件なのだ。そのことは、二三年前の「反マル生闘争」をはじめ過去の闘争は誤りだったと全通が公式に自己批判するということを意味する。そのとおり。いくら歳月が経とうが全国の現場では、郵政の非人間的な労務政策、差別、労働条件悪化に対し、粘り強く闘う全通組合員が存在しているのだ。その象徴でもある4・28反処分闘いを「一人の首切りも許さない」という労働組合の原点にこだわりながら継続している仲間がいる。闘う全通の歴史に泥を塗り否定する全郵政との合併を白紙に戻して、労働運動の再生に向けがんばろう。

(名古屋 哲一)

団への信頼と忠誠は不思議な魅力

— 一〇年ぶりの国労闘争団訪問 —

今度ばかりはとOさんも

六月一七〜一九日、「国鉄闘争団とともにたたかろう会」の呼びかけで、一四名の仲間と音威子府、稚内、名寄、旭川の国労闘争団をお訪ねした。闘争団が組織されて前後五〜六年は、私の生活のなかで大きな比重を占めていた国鉄闘争だが、その後は老親の介護等も加わって生活に埋没し疎遠になっていた。今回の訪問は四度目であるが、十年ぶりである。「国労大会や中央委員会での機動隊導入」、「査問委員会の設置」など驚くべきことが続くなかで、とにかく、現地闘争団の方々の思いを直に聞きたいと参加したが、行く道は重い気持ちをぬぐえず、「これ以上忙しくできないし…」など自問自答したりしていた。

JASの朝一便で旭川に着いたのは午前十一時頃、つめたい雨が頬をぬらし、とても寒かった。私は障害者運動に熱心なOさんと話しながら歩いていった。Oさんは足が不自由、杖で支えながら一生懸命だった。途中、Oさんが、「僕タクシーでいきますから」といった。その時私は、「え、なに、すぐそこですよ。あそこに見えている…」と即座に声を出した。が、顔も服も汗だくのOさんに気付き、あわてて「あ、やっぱりタクシーでいきますか」といい直した。その時、「北の大地を歩くのも良いものでしょう」と叫ぶ大きな声がきこえたことで、Oさんも私も笑いながらゆつくり歩いた。Oさんは私に、「十六年間、国労闘争団との現地交流にとっても来たかった。でも、みなさんに迷惑かけるからと思うと申し込めなかった。しかし、今度ばかりはどうしても早くから申し込んだ」と語った。東京では仕事を終えて夜の集会にもしばしば顔を出し、お目にかかるといつも笑顔で挨拶してくれるOさんの日夜の闘いは大変なものであることが身にしみた。闘争団との交流を前に、自らの活動を切り拓く思いと努力、その構えと運動の視点に私はまず気付かされた。

さっそく「協同倶楽部」会員に

旭川の国労会館にたどり着き、さっそく待ちかまえていた旭川闘争団の大塚さんと高木さんのお二人とお昼の食事交流。四月十九日旭川市内でおこなった平和運動フォーラム主催の「人らしく」上映会は参加者二百二十名で大変な反響。首切りリストラ反対、「憲法」改悪反対、「有事法制」反対など、平和と人権を守る闘いと結びつけるいい機会だった。

旭川闘争団の課題は、なんといっても財政確立。年齢の高齢化など、土木・建設業中心のアルバイトが身体に無理で、病気が療養者が四名いる。また、相互の信頼と責任の確立にむけ、家族相互・家族と闘争団などの意志疎通が課題だと率直に述べられた。

また、国労闘争団有志で発足させた、生活と闘いを一体化する活動、「協同倶楽部」に話が集中し、「安心・安全・良質・低価格」の生活密着商品開発のご苦労、会員獲得も難航だが、少しずつ体制ができてくつあると。協力を強く求められた。まずは取り扱ひ品を自分の生活に取り入れることが先決、さっそく会員になり、できる限りの注文をした。

不況と「四党合意」が『おといねつ』事業を直撃

旭川から音威子府村まで車で三時間。金見さん、小西さん、石田さん運転の迎えの車で、可憐な草花に囲まれた闘争団の事務所に着いたのは夕方四時近く。羊糞工場と木工所をまじく見学。羊糞は種類も多くなり、十年前とは較べものにならないほど仕込み量も多い。しかし、月間五千本の製造体制が、今は三千本体制に後退しているということであった。こ

れは、不況と「四党合意」以来の国労本部への不信のひろがりのダブルパンチで、今、団員の数名が目標を持って、新たな販路を求めて全国行脚に出ているという。

木工も記念品や贈答用として製造・販売。労働組合結成五〇周年記念でたくさん出た時期もあったが、今は厳しいという。出来映えは芸術品と評価も高い木工品の数々、本当に素敵だ。時計、印鑑入れ、ペン立て等々在庫はたくさんあった。特別注文で日本人形の可愛い下駄まで器用につくりあげていた。オリジナル商品も予算に応じて見積もって作るという。私も印鑑ケース、フォトスタンド、三段小物入れなど、さつそく仕事場において。小西さんらが心をこめて磨き作り上げた木工品、やさしい輝きが心を豊かにしてくれる。

発売楽しみ「新商品」

二日目昼は自由行動。稚内に向かう組と音威子府の自然探索組とにわかれた。私は九人で稚内へ。出発まで雲が厚く、見れないと諦めていた利尻の山と海の表情はまばゆいほどに輝いていた。金児さんの先導でサロベツ原野へと向かったが、途中道を間違えたらしく、工事中の二人に道を聞いた。知らないという。ふと車のナンバーを見ると「福島」だった。

ほどなくして稚内闘争団の団長の万城目さんと合流。講堂ほどの大きな団の事務所に着。活気に満ちていた。全員が座れるほどの応接セットに腰をかける間もなく、百年記念塔に行こうと前団長の池辺さん運転の大きな車に乗り込んだ。塔からは稚内の海と市内全景が見えた。「もう少し晴ればサハリンも見えるのに……」と池辺さんは残念がっていた。

入場料は一人四〇〇円。万城目さんが財布を出した。私は会計係を仰せつかり、闘争団には経済的負担を一切かけないようにときつく言われていた。すかさず私がお金を出すと、「私の方で済みます」と言ってくれる人がいた。稚内闘争団の地元の支援者だった。万城目さんと私の顔を見て「頑張ってください」と励ました。音威子府でも、交流会にお願いした海の幸、山の幸は、地元の支援者の「三宅商店」がはずんでくれたという。国労闘争団・家族の地域での日頃の活動とつき合いが暖かく伝わってくる場面であった。

海辺にある稚内闘争団の事業体イカ工場に案内された。工場といってもがっちりしたものではありません。冬の風の強い日は命がけと思われるほどの小さな家屋。しかし、増築中であつた。ここでも「四党合意」以来売り上げ減少。対策はイカの塩辛、沖漬け、いくらなど新たな加工品づくりだ。保健所と相談し企画。しかし、お金をかけられない。工場の竹谷（たけや）さんと今井さんらは廃材をあつめ、自分たちで増築している。イカも手作りなら、工場建築も手作りだ。イカの一夜干しの工程も見せてもらったが、宝石のように大事そうにイカを手にとり、針の穴よりも小さな虫もピンセットで手早く取り去り、海風に干す。仕上げる丁寧さには頭が下がった。新商品も試食し舌鼓を打った。発売が楽しみだ。

「名寄的にマイペースで」

三日目は帰路、名寄闘争団へ。事務所は通りに面したビルの二階。団長の西原さん、北海道エリヤの役員でもある多田さんが迎えてくれた。黒板には日程表がびっしり。全団員のその月その日の行動が一目で分かる。佐久間誠さんが鉄建公団訴訟原告団の事務局長就任で、これまでの彼の任務をそれぞれに振り分け、それぞれが引き受け定着してきたところだといっていた。西原さんは、「名寄も状況はさらに厳しくなったが、これからも頑張っていく。名寄的にマイペースで……」と挨拶。なにか知れない落ち着きがあつた。

事業体のサンピアを案内されて驚いた。建物は古いが、大きな看板とサンピアと大書された運送用の車がどっしりと頼もしい。クーリーニングの顧客数にも驚いた。お店も建て増し手作りだ。集められた衣類は名寄で一番大きな工場に運ばれるが、その工場のシェアの

七〇%を占める程だ。配送、宅送、お米屋も同時進行で、六人が働き、「昨年から社会保険にも入った」と嬉しそうに語っていた。

とにかく「緊急カンパ」が最大の課題

音威子府での闘争団・家族との交流会は月火水の忙しい平日に三回もつてくださった。一日目は地元共闘と事務局、闘争団・家族代表と。二日目は公民館で五〇数名の大交流で、仕事を終え、疲れた体で車を飛ばし参加してくれた。三日目は闘争団事務局と三人の家族で、総合的な交流。それぞれ涙ながらの深刻な内容の話がつづいた。

「病院に行くにも六〇キロ先、子供を預ける施設もなく、エプロンやハンカチづくりの内職をしながら闘争を始めた。子どもが大きく育ち、会社やお店に勤め始めたが……」「四年間勤めたお蕎麦やさんが倒産。雇用保険も三カ月で切れる。仕事がない。名寄まで通いヘルパー二級講習を受けている……」「子供たちの教育費、定期代だけでも一カ月一万円超。高校・大学に進学を希望すれば借金しなければならぬ」「仕事があれば、生活もお父さんたちも楽になるのだが……」と語る妻たちの話は想像以上に厳しい内容だ。

音威子府の人口は、一九五四年四二八四人をピークに現在は一二〇〇人前後だ。国鉄が分割民営化される前は宗谷本線と天北線（一九八八年五月廃止）の分岐点で「国鉄の村」として栄えたとか。現在の音威子府駅に当時の模型があるが、線路がたくさんあってびっくりにした。今は、一両だけの電車が上下とも二〜三時間おきに寂しく行き交うだけだ。

四八名で始まった団は、一六年の経過のなかで四四名が団を組織し、毎日精一杯生き抜いている。団員は収入を全ていったん団に入れ、改めて自己申告、その額を貸付として支給を受ける。これを「組織的自活」と呼んでいる。月額二二万円（最高限度額）〜月額二万円（最低）と幅がある。平均貸付額は月額一六万円弱だ。今、何にお金がかかるかといえば、それは子供の教育費だ。高校・大学が三二名、小・中・幼児二五名。本部からの月々二万五千円の生活援助金は、土木建築の仕事のなくなる、収入が半減する冬期を、みんなでも乗り越えるための資金として積み立ててきた。これが国労本部によってうち切られる。毎月の生活の大変さと合わせ、雪深い冬をいかにクリアしていけるか……。

組織的自活を一言でいうと何と問いかけられた。ある者は「小さな社会主義共同体」と答え、私は「大きな家族」といった。しかし、それは組織活動の結果のみに着眼しただけだった。当事者は「互いに干渉しあう生活」「土足で入り込む生活」と答えたのである。それも軽やかに微笑みながら……。団員・家族はくじけていない。「今を克服し、やり抜いて勝ちたい」と。夫が長期東京滞在中、留守を守る息子二人と暮らし自分の仕事も大変という女性と交流した。彼女は夫に相談したいこと山ほど……と涙ぐむ。「じゃ、団に言ってお父さんに戻ってもらえば」と問う私。彼女は「そんなことできません。団で話し合っただけのことだから……」と、明るく目を輝かせた。団への信頼と忠誠は不思議な魅力だった。

「当面、事務局員を減らし、アルバイト班を増やし、物販の販路拡大の全国行脚で目標を達成し乗り切ろうと確認。今それぞれの持ち場で精一杯頑張っている。秋に集まり点検、再検討する」との団長・金見さんの報告に、闘争団員と家族は笑顔でうなずいていた。

激励団一五人は、「とにかく緊急カンパ」だ。「この夏どれだけ集められるかだ。当面緊急カンパの一点に絞って、本気で取り組むことだ」と。それぞれ決意が述べられた。

今、全国どこでも誰でも不況の影響などで厳しい。しかし、もう一度生活を自己点検し、一ひねりすればお金もできそうな気がする。羊羹や魚など物販も体を動かせばできそうだ。「仲間にカンパの呼びかけができる自分をつくりたい」と心から思った。（滝野 嘉津子）

われわれの夢は実現する

—カストロ議長のメーデー演説から—

キューバはラテンアメリカの先進国

ジュネーブでわれわれを非難し、あるいは反キューバ決議案の共同提案国となったラテンアメリカのすべての国々、そしてそれぞれの国は、市民の健康的で品位ある公平な生活の基本である教育・文化・社会的指標からほど遠くにいる。それらの指標の一つでも、キューバに匹敵する国は一つもない。時間に制限があるので、キューバと比較したラテンアメリカ全体について、いくつかの指数に触れるに留めよう。

非識字率 ラテンアメリカ全体は一一・七%、キューバは〇・二%

教師一人当たりの人口 ラテンアメリカ全体は九八・四人、キューバは四三人、つまり一人当たりの教師の数は二倍、三倍になる。

初等教育の就学率 ラテンアメリカ全体は九二%、キューバは一〇〇%

中等教育の就学率 ラテンアメリカは五二%、キューバは九九・七%

初等教育で五年に達する児童 ラテンアメリカ七六%、キューバ一〇〇%

出生千人当たりの乳幼児死亡率 ラテンアメリカは三二、キューバは六・二

人口一〇万人当たりの医師数 ラテンアメリカ一六〇人、キューバ五九〇人

人口一〇万人当たりの歯科医師数 ラテンアメリカ六三人、キューバ八九人

人口一〇万人当たりの看護婦数 ラテンアメリカ六九人、キューバ七四三人

人口一〇万人当たりのベッド数 ラテンアメリカ二二〇床、キューバ六三一・六床

医療機関での出産 ラテンアメリカ八六・五%、キューバ一〇〇%

平均寿命 ラテンアメリカ七〇歳、キューバ七六歳

一五歳—四九歳の住民のエイズ感染率 ラテンアメリカ〇・五%、キューバ〇・〇五%。

人口百万人当りエイズ年間発症率 ラテンアメリカ六五・二五人、キューバ一五・六人

ラテンアメリカ研究所による教育の質に関する評価第一回国際調査の結果(わが国を含むラテンアメリカ二ヶ国で実施された) —

三年生国語 キューバ八五・七四点、その他の一ヶ国五九・一一点

四年生国語 キューバ八七・二五点、その他六三・七五点

三年生算数 キューバ八七・七五点、その他五八・三一点

四年生算数 キューバ八八・二五点、その他六二・〇四點

これらの指標に関して、キューバ非難票を投じたラテンアメリカ七ヶ国のうち、コスタリカ、チリ、アルゼンチン、ウルグアイの四ヶ国は以前、地域でもっとも高い指標を誇っていたが、現在はわが国のそれからかなり遠いものになっている。そのうちのいくつかは、キューバの半分かわずかに半分を越えるかで、その他は数倍も低い。〇歳—五歳の幼児教育では、チリの場合、その年代の子供の一五・八%のみが受けているに過ぎないが、キューバでは九九・二%である。

最近の出来事から

帝国の主人(アメリカのこと)にそそのかされて、マフィア的行為を強行するのは破廉恥としか言えない。

ポリバル主義革命(ベネズエラ)が起き、国民と軍部の密接な団結のもとに前例のない

革命的、民主的プロセスが展開されたが、それへの答はファシスト的クーデターであった。国の収入の大部分を享受し、最も強力なマスメディアを所有する特権的な独裁支配層は、帝国主義の鼓舞と支援を得て、ポリバル主義の国民と大統領府に対して彼らの追従者を放ち、流血の衝突を起こして、少数ではあったが要所を押さえた軍部によって準備された行動を正当化しようとした。奇跡的に流血の内戦は避けられた。それは、理性的で冷静なチャベス大統領の行動、ポリバル主義を受け継ぐ国民の支持、この兄弟国の軍隊の大部分の将校や兵士の忠誠のおかげであった。複雑で困難なラテンアメリカの歴史の新しいページが、この半球でスペイン植民地からの最初の独立闘争を開始した国民にたいして開かれた。モンテレーでのキューバ代表への権利剥奪、ベネズエラでのファシスト的クーデター、ジュネーブでの破廉恥行為が、この順番で起こり、それらは帝国の家来たちの汚い偽善的な政策を試し、明らかにした。

ブラジル、エクアドル、ドミニカ共和国、ハイチおよびカリブ英語圏諸国の大統領は、クーデター派の歓喜に加わらなかったことを指摘しておこう。同様に、上記の国々とボリビア、コロンビアは、ジュネーブでの破廉恥行為に加わらなかった。

誰もファシスト的クーデターを非難しなかった。例外はアルゼンチン大統領で、多分、自国の危機的政情ゆえに、警察の軍曹に打倒されることを恐れたのであろう。

モンテレーの恥ずべきエピソードの後（一ヶ月後）、スキヤンダルが炸裂した。品格ある沈黙を守った人もいたが、権威失墜した忌むべき米州機構の著名な事務局長は、キューバへの権利剥奪を支持する毒矢を放った。その機関が真に存在するならばの話だが。主権をもっているかのように見える統治者の多くは、何とひどい輩だ。

キューバはアメリカに屈しない

キューバは、今回キューバ非難票を投じた現在の政府と同様なほとんど全部の以前の政府に抗して一人で闘った過去がある。当時はそれらの政府はビッグス湾侵攻をめぐって米国と同盟していた。また、一九六二年の一〇月危機の折、地上から消し去られようとしていたとき、一瞬たりとも迷うことなく英雄的に耐え抜いた。わが祖国のこの名誉ある歴史を見たら、ジュネーブでアメリカ合衆国と共謀した者達は恥ずかしく思うに違いない。もし彼らに恥じる自由が残っていたならばの話だが。社会主義圏が崩壊し、ソ連が解体し、あらゆる医薬品・食料の輸出を含むヤンキーの封鎖が強化された。この経済封鎖は一九四八年、一九四九年の協定により、ジェノサイド犯罪とみなされるものだ。この時、皆がキューバ革命は数週間で崩壊するだろうと思った。しかしわが国の国民は前例のない英雄主義と不屈さで持ちこたえた。彼らはそれを、赤面せずに無視することはできないだろう。

キューバは、想像し難い困難や脅迫、テロ攻撃、あらゆる種類の危険に耐えてきた後で、覇権主義的超大国の前にその旗を降ろすことはなかったし、これからもない。その超大国は今日、この不幸な半球で家来達や靴なめを甘受する者達にたいし、テロリストで現在ラテンアメリカ担当国務次官補になっている人物を通じて命令を下している。キューバはアメリカ政府から何ら尊重されず、ラテンアメリカ諸国側からも恥を示されることなしに闘っている。

主権国政府との紛争によって、キューバの名誉とモラル、信用が問題にされたとき、虚と偽善が、ラテンアメリカで支配的な政治・経済システムの、切り離すことのできない、ほとんど唯一の道具であることが証明された。

キユーバは労働者の民主主義がある

キユーバには民主主義がなく、人権も尊重されていないという帝国主義的スローガンを愚かにも叫び、繰り返す者達にたいし、私はこう答える。いかに小さい国であつても、わが国が今地球上で最も独立した国、最も公平で連帯的な国であることに、誰も疑問をささむことはできない。また、長い目でみたら、最も民主的な国でもある。

政党は一つあるが、党としての候補者はたてないし、選出もしない。それは禁止されている。各地域の下部で候補者を選び、提案し、選挙するのは、市民である。わが国には、うらやむべき団結があり、それがますます強固で不滅なものとなつていく。マスメディアは公共性を有し、特定の個人や団体に属さないし、属することもできない。商業宣伝は一切行わず、消費主義を奨励しない。娯楽を提供し、報道し、教育する。そして狂わせない。

キユーバはすでに、国民の生活と政治的、市民的、社会的、人間的な最も基本的な権利を保障するための基盤とされます。多くの分野で、他者が乗り越えるのは困難なほどの世界の頂点を極めていく。それは、国民の福祉と未来を保証するためである。キユーバの国民大衆の政治的知識は、他のどの国にも負けない。文化的、社会的プログラムとその成果は、かつてない速さで前進している。

われわれの夢は実現する。より人間的な社会の実現は可能である。嘘や中傷は問題ではない。歴史がそれを認めるであろう。

社会主義万歳！

祖国か死か！

われわれは勝利する！

◇ 読者からのおたより ◇

区長選で惜敗 いつも通信をお送り下さりありがとうございます。中野区（東京）全国にさきがけて憲法擁護、非核都市宣言や教育委員の準公選で平和・民主主義の区政を続けてきました。中野区の財政赤字をはじめさまざまな悪条件のもとで、過日区長選挙がありました。新社会、社民、共産の統一候補で高山真三氏は二万一千四百七票を取りましたが五二九票差で惜敗、残念ですがこれががんばりです。（中野・W）

査定 郵政の現場は、総務主任が査定するようになってきた。管理者が査定するより公平だからだそうです。なんとこれに労働組合はクレームをつけません。いつのまにか、労働組合の先頭におどりでた感じですよ。（徳島・A）

平和キャラバン 有事法制反対で毎週土・日県内キャラバンで宣伝カーで走り訴えています。ポスターも独自に印刷、ビラ配りもしています。平和な日本と世界創るため頑張ります。（熊本・I）

株主総会 六月二十六日、JR東の株主総会（初めて）に参加しました。社員株主が声をそろえての「了解・拍手」には、JR東の将来はどうなるのか。国会での有事法制―先送りになりましたが、JRは公共交通として戦争にかりたてられるのに、そして一番に戦争に社員が動員されてしまうのに、と不安に思っています。（北海道・K）

軍備に守られたスポーツ祭典 サッカーの日韓共催ワールドカップが終わりました。でもご存じでしたか。このW杯を「守る」ため横須賀の米空母が韓国沖に出動し、日本ではAWACS（空中指令機）まで動員し、韓国の会場周辺にミサイルが配備されたことを。こんな軍事作戦態勢をバックにして、本場に「平和・友好」のスポーツ祭典といえるのでしょうか。（奈良・I）

編集部より アメリカカチムは軍隊に守られての行動と試合。どこの組合の大会を見ているようにでもありました。

国家守って人守らず 有事法制は明らかに憲法違反の法律。現行憲法は「有事」、つまり戦時を想定していません。徹底的な不戦主義（前文、九条）を貫くことを定めたからです。同法は個人のレベルまで戦争に協力することを強制し、国家による命令で財産や住居、労働権などを徴用することを可能にしています。しかも、これを拒否すると刑罰まで課すというのです。「人殺しを断れば刑務所行き」、こんなバカなことはありません。政府は国民の生命、身体、財産を守るための有事法だといえます。しかし、今国会では患者や加入者の負担を大きくする医療保険の改悪が審議されています。年金改悪

や失業の増大など、真に国はわれわれを守ろうとしているのでしようか。(教育労働者・N)

編集部より 近く有事法制中心の勉強会。「国家守って人守らず」、いただきます。今年も平和展 年々風化する戦争の悲惨さを忘れないために、そして平和の尊さを次の世代に語り継ぐために、今年も平和展を開催。昨年につづいて組合員・家族の作品展も併設します。展示物は①丸木美術館蔵「原爆の図」一九九点、②ヒロシマ原爆写真展パネル、③アニメ映画「まっ黒なおべんとう」④折り鶴ユーメー等。(自治体労働者・K)

編集部より 年々、充実のごようす、さらにご活躍を。
都労連・新人事 都労連大会で新しい役員が選出されました。委員長は増渕静雄(都庁職)、書記長・武藤弘道(全水道東水労)、書記次長・根岸利光(都庁職)、副委員長は都庁職、(自治労・Y)都高教から選出されました。(自治労・Z)

応援ありがとう。幻の魚と言われるイトウから挨拶あつて良かったですね。いつも優しいまなざしの応援ありがとうございます。(名奇・N)

ぜひまたご夫妻で 東京も気温の差が激しく過ぎずらい様ですが、こちらはまだストーブが必要な毎日です。先日はお忙しい中お越しいただき有り難う。強行スケジュールでお疲れになったと思います。良くも悪くも十五年、難しい事も多くありますが、一日も早く当たり前の生活をするために頑張ります。是非、またご夫妻でお越し下さい。(音威子府・M子)

「何かないかなあ」 まず「かつてに!?」集配分会にゆうすを創刊したのですが、これは、まざれもなく「全通中丹 集配分会ニュース」のバクリです。足立吉己さんには大変失礼とは思いつつ、ただのノリで創刊しました。いろいろと忙しい職場の中で、何かないかなあ、と思う今日この頃です。集配分会では青年部員の方には、協力をさせて頂いているようですが(感謝)、一方で「青年部常任委員」何をやっているのかが伝わりにくい。いろいろ簡略化されてますけど、今年度は、「青年部に元気がない」といった声も聞かれます。けつこう忙しそうなんですけどね、青年部も。日付が変わってから家に帰ることもあるみたいです、ハイ。まあ、末永い目と、寛大な心で見守ってやって下さい。(京都・K)

編集部より 職場新聞が少なくなっている中、大変な壮挙に感激。いい先輩がいて幸です。支援継続 五月十八日第六回「正光会労組を支援する会」総会が約七〇名の出席のもと開催。当日は、準職員不当解雇事件の裁判闘争で四名が完全勝利を勝ち取り全員が職場復帰を果たしたことから「裁判闘争完全勝利・励ますつどい」と併せての開催。

総会は、中村幹事(愛媛県職労)を議長に選出し、大塚代表が挨拶で「裁判闘争で四名全員の職場復帰を勝ち取るという大きな成果を上げました。しかし、経営側は組織潰しの姿勢を変えていないことから、引き続き連帯しと闘うに闘う」と決意を述べました。正光会労組下田書記次長から「労使関係の経過と現状」が報告され経営側の組合無視、組合員差別、働く者の権利侵害の態度に変わりが無いことが明らかにされました。(正光会労組・T)

編集部より 勝利報告は全国に大きな激励となりました。ご健闘を! 全国のモデルつくつて! 変わる方針案 定期大会の時期となりました。出勤したら机上に方針案。スローガンはあるのですが、闘いがいつさいありません。数年前から「闘い」という文字が「取り組み」に変わり、「交渉の場」が「話し合いの場」に変わってしまいました。本場に職場と生活が守られるのですか、批判ばかりしていても仕方ありません。批判するだけなら誰でもできます。批判から闘いにつながるためにはどうしたらよいか。私自身もそうですが、これが連合傘下の組合員で不満を持っている労働者の課題では?

編集部より 「通信」第八四〇号に問題意識を書いてみました。「情勢は変わった! 旧い意識から脱却を」についてご意見いただければ嬉しい。

クラウゼヴィッツってどういう人 「通信」八三六号の「戦争論」(クラウゼヴィッツ)にみる有事法制」を興味深く読みました。ところで、クラウゼヴィッツってどういう人物でしょうか。(K) 編集部より クラウゼヴィッツはプロイセンの軍人を父(一七六七年に軍務を解かれ、小さな町の収税官として着任)に、一七八〇年七月に生まれ、十二歳の誕生日間近に入隊を許され、軍事理論家の道を進み、古代からナポレオン以降の国家権力の発動たる戦争を分析し、著したのが『戦争論』(岩波文庫、全三巻)。近代軍事論の基礎として今日も読みつがれています。この『戦争論』は明治の時代の陸軍が教科書としたとのこと。翻訳者は陸軍軍医総監であった森鷗外(森林太郎)。

社宅は工事中 例年より三日遅れの梅雨入りとなり、イヤな時節となりました。甘露と思ってるのは、紫陽花ばかり。社宅も四月から外壁工事等が入っており部屋の中は暗く、湿っぽい限りです。落着きましたら、また集まって暑気払い(早すぎる?)しましょう。(東京・K)

編集部より 連日、ご多忙のごようす。しかも私の仕事まで手伝わせて。ごめん!

— 14 —